



アイヌタイムズ

第 32 号

2004 年 12 月 29 日 (水) アイヌ語ペンクラブ

アイヌタイムズ第 32号(2004 年 12 月 29 日発行)からアイヌ語抜粋
著者: 横山裕之

ウペウ

(アイヌ イタク [アイヌ語])

ウペウ アナクネ セリ科植物 シンリチ ネ。シンリチ フラ ルイ ワ、オムケカラ カ ホナラカ カ アン コロ クスリ ネ アカラ ルウエ ネ。フラ ルイ ペ ネ クス パヨカカムイ エマカ セコロ ヤイヌアン ルウエ ネ。ポン チセ オロ タ アアツテ カ キ、セタ レクチ オロワ アラ チツケレ ルカ キ ルウエ ネ。

織田ステノ フチ エネ ハウエアン ヒ; "ウペウ イワニンジン ネ セコロ サモ ウタラ イエ ハ ウエ ネ。イワニンジン アン コロ、サヨ オロ アオマレ。フラ アツ コロカ、アエ コロ ケラーン ペ ネ ヤク アイエ。フチ ウタラ、ポン ヒ タ ネブ アエレ ヤッカ ケラアン クニ ラム コロ エ ルウエ ネ... ウペウ ネ ヤッカ カムイカラクスリ ネ セコロ ハウエアン コロ、フチ ウタラ ポンノ オムケカラ フマシ コロ、ワッカ ス オロ オマレ ワ ポプテ ヒネ、ウペウ トウラ ポプテ ワ ク。エカシ ウタラ カ クレ シリクポン ヒ タ クヌカラ アムキリ。" セコロ ハ ウエアン。

田畑アキ フチ エネ ハウエアン ヒ; "ウペウ アタ ヒネ ピリカノ アフライエ ワ アサクテ。ポイソ ン クンネチシ コロ、アクイクイ コロ、チセ ソウストウ アエワレワラ パ ルウエ ネ。オカ ケ タ ネ ポイソ ン マカナク アン ヤ セコロ クヤイヌ ワ クヌカラ コロ、ソモ チシ。マカナク イタク アイエ コロ アエワレワラ ペ ネ ヤ

ウペウ

(日本語)

ウペウは、セリ科植物の根です。その根は、強い臭気を有し、風邪、腹痛があると、薬にされました。強い臭気を発するため、病魔がいやがると思われました。小屋に吊るしたりしました。犬の首からぶら下げたりしました。

織田ステノさんは、次のように言っています: 「ウーペウはイワニンジンとシヤモたちは言っていた。イーワニンジンがあったら、おかゆに入れた。その匂い(あつたが)、食べたらいしいものらしい。フチたちは、小さい時は食べさせられても、何を食べてもうまいなあと思って食べたもんだ。。。ウーペウだって kamuy-karkusuri だといって、フチたちは少し風邪気味なら、お湯を沸かして、ウーペウとともに煎じて飲んだ。エカシたちにも飲ましたのを小さい時に見た事がある。」と言いました。(アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査 IV)、北海道教育委員会、1984、p77)

田畑アキさんは、次のように言っています: 「ウペウ掘って、きれいに洗って干します。赤ん坊が夜泣きしたら、そのウペウをかじりながら、家の隅に何度も息を吹き掛けます。その後その赤ちゃんがどうなるかなと思って見ると、泣きません(泣かなくなります)。どのように言葉を使いながら息を吹きかけたかわかりませ

カ ケラミシカリ。” セコロ ハウエアン。

松永たけ カツケマツ エネ ハウエアン ヒ: "カシ アキク ヒ タ アエワンケ。アシンニ フチ、アパ カムイ オロ タ カシ アキク ヒネ、オロ ワノ ウペウ (カラフトニンジン) アニ アエウ オンネレ。ウペウ アポプテ ソモ キ ノ ワッカ オロ アオマレ パテク ネ ヤッカ ピリカ。朝鮮人參 ネノ アン フラ アツ ペ ネ ルウエ ネ。" セコロ ハウエアン。

知里真志保 ウペウ イブキボウフウ ネ セコロ ハウエアン。学名 アナクネ "*Seseli libanotis var. japonica*" ネ。ウペウ イブキボウフウ ネ セコロ インネ 研究者 ウタラ ハウエオカ。

コロカ、胆振、日高 オロ タ、ウペウ アナク イワニンジン ネ セコロ アイエ ヒ カ アン。イワニンジン アナク "*Angelica hakonensis Maxim.*" セコロ 学名 アン。"*hakonensis*" オロ ウン "ハコネ" ネ クス、箱根 オロ ウン イワ カ ウシ ペ ネ ワ、アイヌモシリ (北海道) オロ タ イサム ペ ネ。クス、アンペ アナクネ "イワニンジン" セコロ アレコレ ヒ スンケ ネ ワ、シノ 和名 (シサム レヘ) カ ソモネ。

アイヌ民族博物館研究報告第8号 オロ タ 北海道立衛生研究所 オロ ウン 姉帯正樹 ニシパ エネ ハウエアン イ: "シラウ・オ・イ (白老) マチヤ オロ ウン 野本 ウタリ ネヤ、松永 ウタリ ネヤ、岡田 ウタリ ネヤ、"イワニンジン" ネ クニ ラム ア ヲ クヌカラ コロ、カトウフ アニ "カラフトニンジン (*Conioselinum kamtschaticum Rupr.*)" シンリチ ネ ヒ ケラマン ルウエ ネ。" セコロ ハウエアン。

ピラトウル (平取) ウン ヌブキペツ (貫気別) オロ ウン 黒川 ウタリ オロ タ エトイタ ウペウ カ "イワニンジン" ネ セコロ アイエ。姉帯ニシパ エネ ハウエアン ヒ: "ネワアンペ カトウフ アニ センキュウ (*Cnidium officinale Makino* [セリ科]) ネ ヒ ケラマン ルウエネ。センキュウ アナク クスリ ネ アカラ ペネ ワ、寛永時代 オロ タ 大陸 オロ ワ 長崎 オロ ウン アトウイトモトウイエ ワ アルラプ ネ ヤク アイエ。明治 ワノ 大正 パクノ、本州 オロ ワ シサム コロ ワ エク ヒネ、"イ

ん。"(アイヌ生活誌、(財)アイヌ無形文化伝承保存会、1984、p31)

松永たけさんは、次のように言ってます:「カシキクするときに使う。アシンニフッチ、アパカムイのところでカシキクして、それからウペウ(=カラフトニンジン)でもって顔洗わせる。ウペウは、煮出さなくても水に入れてだけでいい。朝鮮人参みたいな匂いがする。」と言いました。(アイヌと植物(薬用編)、(財)アイヌ民族博物館、2004、p4)

知里真志保は、ウペウは、「イブキボウフウ」であるとしました。学名は、*Seseli libanotis var. japonica* です。多くの研究者は、ウペウは「イブキボウフウ」であるとしました。

しかし、胆振・日高地方では、「ウペウ」は「イワニンジン」であると言われる所もあります。「イワニンジン」は、*Angelica hakonensis Maxim.* (セリ科)という学名があります。「*hakonensis*」のハコネは本州の箱根なので、箱根付近の山地(の岩石地)に生えるものであり、北海道にはないものです。したがって、本当は「イワニンジン」と名付けるのはウソであり、本当の和名ではありません。

アイヌ民族博物館研究報告第8号の中で、北海道立衛生研究所の姉帯正樹氏は、以下のように言っています:「白老町の野本家、松永家、岡田家が「イワニンジン」とそれぞれ考えていたものを調べたところ、その形により、カラフトニンジン *Conioselinum kamtschaticum Rupr.* の根であることがわかりました。」と言いました。

平取町貫気別の黒川家で植栽しているウペウも「イワニンジン」と言われてます。姉帯氏は、以下のように言っています:「これは、その形により、センキュウ *Cnidium officinale Makino* (セリ科) であることがわかりました。センキュウは、寛永の頃に大陸から長崎に運ばれたと言われています。明治から大正まで、和人が本州から持ち込み、「イワニンジン」という名を付けたのだらうと考えられます。」と言いました。

ワニンジン" セコロ アレコレ ナンコロ セコロ
ヤイヌアン ルウエ ネ。" セコロ ハウエアン。



センキュウ

写真提供: 姉帯正樹氏

ポン・ナイ・プトウ (浦河) マチヤ オロ ウン
遠山サキ カツケマツ "キムンウペウ アナク
イワニンジン セコロ レ アン ペ ネ。" セコロ
ハウエアン。コロカ 姉帯 ニシパ エネ ハウエ
アン ヒ: "ネ ワアンペ ノカハ アニ ホソバト
ウキ (*Angelica stenoloba Kitagawa* [セリ科])
ネ ヒ ケラマン ルウエ ネ。シンリチ アナクネ
生薬 オロ タ 当帰(トウキ) セコロ アイェ プ
ネ ルウエ ネ。当帰 アナク オロ ウン 精油
アン ペ ネ ワ、アニ アネトパケ アポプケレ
クニ クスリ ネ アカラ ルウエ ネ。" セコロ
ハウエアン。

遠山サキ カツケマツ エネ ハウエアン ヒ: "キ
ムンウペウ (ホソバトウキ)、シンキアン カ オ
ムケカラカ アホニ ウエン カ キ コロ ア
ポプテ ワ アク ルウエ ネ。オヤ キナ アコポ
イエ ワ アポプテ ヒ カ アン ルウエ ネ。" セ
コロ ハウエアン。

センキュウ アナク 当帰(トウキ) ネノ アン
薬効 アン ルウエ ネ。黒川セツ カツケマツ "
イワニンジン、オムケカラコ アポプテ ワ
アク ルウエ ネ。イワニンジン アナク ウペウ
(センキュウ) ネ ルウエ ネ。" セコロ ハウエ
アン。

タブ ネノ、アイヌ イタク アニ "ウペウ" セコ
ロ レ アン ペ アナクネ、シサム オロ タ ポロ
ンノ 学名 アン ワ、ウサ コタン オロ タ ウ
サ "ウペウ" アン ルウエ ネ。

浦河町字姉茶の遠山サキさんは「キムンウペ
ウはイワニンジンと言われるものです。」と言
いました。しかし、姉帯氏は、以下のように言っ
てます:「これは、その形により、ホソバトウキ
Angelica stenoloba Kitagawa (セリ科) であるこ
とがわかりました。この根は生薬では、当帰(ト
ウキ)と呼ばれるものです。当帰(トウキ)は、
精油を含み、それで人の体を温めるために薬
にされます。」と言いました。

遠山サキさんは、次のように言っています:「キム
ンウペウ(=ホソバトウキ)は、体がだるかった
り風邪をひいたりお腹の具合が悪かったりする
と煎じて飲んだ。他の草も混ぜて煎じることも
あった。」と言いました。(アイヌと植物(薬用
編)、(財)アイヌ民族博物館、2004、p5)

センキュウは、当帰(トウキ)に似た薬効があり
ます。黒川セツさんは、「イワニンジン、風邪
ひいた時などに煎じて飲む。イワニンジン、
ウペウ(=センキュウ)のこと。」(アイヌと植物
(薬用編)、(財)アイヌ民族博物館、2004、p
5)

このように、アイヌ語で「ウペウ」という名のも
のは、日本においてたくさん学名があつて、い
ろんな村でいろんな「ウペウ」があるのです。

アイヌタイムズをご購入していただける方がお知り合いでいらっしゃいましたら、お声をかけてい
ただけると大変うれしく思います。

購読連絡先: 〒055-0101 北海道平取町二風谷 80-25 萱野志朗(宛)
購読料: 1500 円 (4 号ごと／アイヌ語版のみ)
2300 円(4 号ごと／アイヌ語版と日本語版)

読者からの投稿募集:

(連絡先): 〒047-0033

浜田隆史(宛)

北海道小樽市富岡 1-32-136

電子メール:

ウェブページ: <https://otarunay.at-ninja.jp/taimuzu.html>

注)アイヌタイムズの著作権は、アイヌ語ペンクラブにあります。

注)1. 赤字は、アイヌ語です。

2. 赤字のイタリック文字は、主に日本語由来のアイヌ語外来語です。